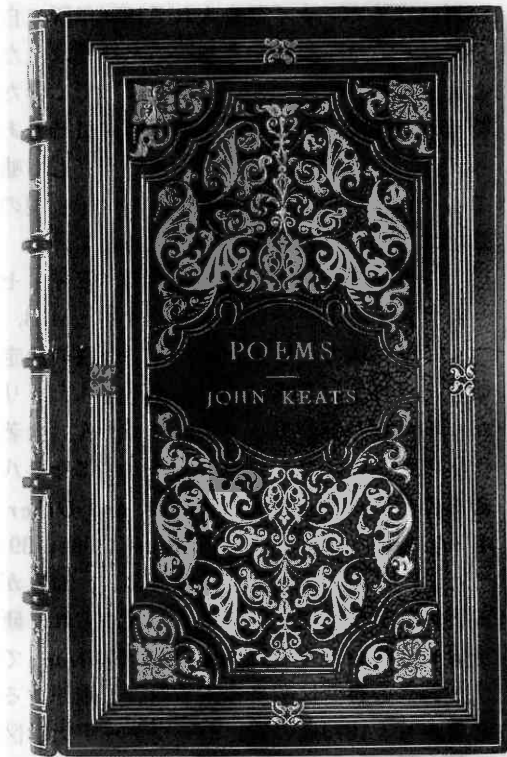


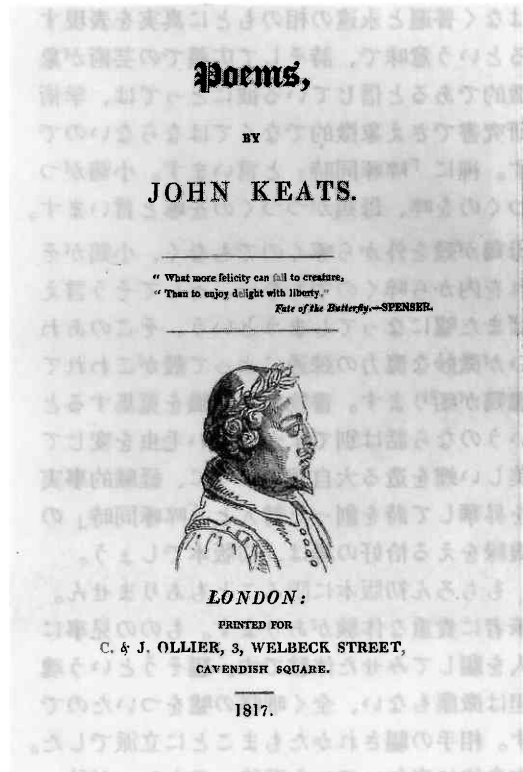
ものに逢える日

初版本キーツ第一詩集
POEMSについて思うこと

文芸学部長 教授 塚野 耕



表紙



中表紙

「花盗人」という言葉があります。桜の枝を折ろうとして捕えられ木に縛りつけられた男でも、一首をものする詩心ゆえに赦されて酒をふるまわれるというのです。酒をふるまってもらえるものなら、縛られて文句はない、一首ぐらいは詠んでみたくなる初版本を、中央図書館が収蔵しています。通称が『1817年詩集』である、英国浪漫派詩人ジョン・キーツ (1795～1821) の第一詩集POEMSです。

これに第二詩集ENDYMION: A Poetic Romance (1818)と第三詩集LAMIA, ISABELLA, THE EVE OF ST. AGNES, AND OTHER POEMS (1820) が加われば、詩人生前の詩集が揃います。詩篇の草稿を検分するが如き贅沢は望めませんが、初版の詩集で詩人と交感し、その心意気をうかがうことが暫し許される場所であれば、楽しい図書館というものです。

個人の書斎の蔵書についても同じことが言えます。古書ことに初版本の値段が高く、各専門領域において周到・厳密な本文研究の成果が活用しえる今日、最新の資料に拠った決定版を研究者が紙表紙本に求めるのは、合理的です。しかし不思議なことで、それでおさまらない読者がいます。物足りないのです。読む手ごたえが要るのです。科学の時代に嗤われるでしょう。しかし事実を描写するのではなく普遍と永遠の相のもとに真実を表現するという意味で、詩そして広義での芸術が象徴的であると信じている彼にとっては、学術研究書でさえ象徴的でなくてはならないのです。禪に「啐啄同時」と言います。小鶏がつつくのを啐、母鶏がつつくのを啄と言います。母鶏が殻を外から啄くのではなく、小鶏がそれを内から啐くのもない、そしてそう言えばまた嘘になってしまうという、そのあわいが微妙な魔力の疎通によって殻がこわれて雛鶏が孵ります。書物から知識を蒐集するというのなら話は別ですが、醜い毛虫を変じて美しい蝶を造る大自然のように、経験的事実を昇華して詩を創った詩人と「啐啄同時」の機縁をえる恰好の場は、初版本でしょう。

もちろん初版本に限ることもありません。筆者に貴重な体験があります。ものの見事に人を騙してみせた体験です。騙そうという魂胆は微塵もない、全く嗤嗟の嘘をついたのです。相手の騙されかたもまことに立派でした。衣食住に事欠いていた戦後、ラトレッジ社・1886年版の五巻ものヘンリー・フィールディング(1707~54) 著作集を見つけたのです。ペーパーナイフが入っていない八つ折判本です。気が遠くなるほどの当時の大金2,500円を用意して、翌日約束の時刻に訪ねますと、前日とはうって変わった厳しい表情で店主は先客とむきあっています。ためらっている筆者に、実とは言って店主が説明した事情はこうです——図書充実をはかっている大阪大学もこの時勢では思うように本が買えない、とうの昔に予約したこの五巻ものの期日がきて、連絡はないし引き取りにもきてくれない、

それで昨日あなたに…ところが大学から今おいでになっているというわけで… 問答：(先客) どうしてもお入用ですか。(私) はい、卒業論文に選んでいます。(先客) は、そうですか、卒業論文に。(暫く間を置いて) それならあなたに使ってもらわなくては。

卒業論文などという嘘がこう嗤嗟につけたその理由はよく判りませんが、読みたかった一念に嘘はありません。誰も手をつけていない頁にペーパーナイフを入れて1886年版に自分で扉をあける瞬間の息を詰めた感動は、たとえようがありません。嘘でも信じてくれた、物静かで品位のあるお方への贖罪の気持もあって、その五巻を丁寧に読みました。もし嘘でもついていなければ、英国第18世紀小説のことは無知に終わっていたと思います。

キーツを筆者が読み始めた頃は、ドゥ・セリンコート版とギャロッド版の詩集とM.B.フォーマン編の書簡集が頼りで、今日の決定版であるロリンズ編二巻本書簡集とスティリンジャの編む全詩集などはありません。全著作集の金字塔はフォーマン父子の手になる八巻もの *The Poetical Works and Other Writings of John Keats* (1938~39) でした。これには書簡以外の散文と、詩人が蔵書に施した傍注と下線までも収められ、研究者必携のいわゆる *Hampstead Edition* です。詩人の書簡に関する或る仮説を確認する必要から、1973年の春、ハーヴァード大学図書館とピアポント・モーガン図書館を訪ねた折、忙中閑をぬすんでブロードウェイ 828 番地にストランド書店の古書を漁りました。日記を写します——

買った数冊の代金を払いながら、帳場係りの青年のうしろにある書棚を眺める。場所柄貴重な書物であるに違いない。あるではないはなにか、八巻ものが。チャールズ・スクリブナーズ・サンズ社発行のハムステッド版の全集である。値段などどうでもよい、買わなくてはと決心すると、向こうの書棚にあってもすでにぼくのものだ。各巻が天金で、函入り。第一巻を開くと再び驚

くではないか。予約購入に1025組、贈呈用に25組を刷っている。編者 M.B. フォーマンが「緒言」に自署し、ときの英国桂冠詩人ジョン・メイスフィールドが五頁の「序文」を寄せて、署名した限定版である。これはその385番である。

番号がついた署名入りの外国の書物は、乏しいぼくの蔵書の中に少しはある。しかしその大半は間接にぼくのところにころがり込んできたものだ。この眼でたしかめて手に入れたものではない。しかも M.B. フォーマン編『キーツ書簡集』(1952年・第4版)を食べて生きてきたようなぼくにとって、彼の署名は家宝になる。感激に我を忘れて代価を支払う経験など減多にあるものではない。古書店に詳しい司書の方に紹介されたところを数軒巡って、ニュー・ヨークはなぜこうも貧弱なのかと愛想をつかしていた矢先きである。ありがとうと呟きながら百ドルを支払い、番号と署名のある第一巻を鞆におさめて、あとは船便にもらった。

署名つきの限定版であるからといって、その書物の中味が変わるわけではありません。しかしこれぞと心に決めてつき合いを始めた書物は、阿古屋の貝殻の中に入った砂粒です。『珠玉』に開高健氏が言う「心の触媒」に飢えた読者が分泌する真珠素によって、その砂粒がくるまれて次第に凝固して真珠になります。「寝かし」具合で名酒になるもので、これは凝り性の人間だけが知る秘密です。凝り性に著しい英国人がことのほか好む表現に、「心をこめて」(*with loving care*)というのがあります。言葉の粹にめぐりあえた欣びに心をこめるさまを、キーツはこう記しました——「それを携えて散策し、それを熟考し、それに思案を回らせ、それをしみじみ味解し、それについて予言し、夢をそれで結ぶと、最後にはそれが気の抜けたものになってしまう」と。

このキーツが、詩壇に君臨するワーズワス、活躍中のバイロンやシェリーをみつめながら、しかもシェリーの忠告にも逆って、新天地へのおのが抱負を発表したのが、『1817年詩集』です。その青年の心意気を、筆者はその初版のままで今読み直しているところです。

(英文学専攻)

